

シンポジウム【アメリカ文学部門】

## Mary Austin の *The Land of Little Rain* 再評価

秋田 淳子

### [1] はじめに

1868年、Illinois州 Carlinvilleに生まれたMary Austinは、科学を専攻してBlackburn Collegeを1888年に卒業する。同年、ホームステッド法を利用してCaliforniaへ移住を希望する長兄Jamesに従いTejon地方に赴く。その移動の体験を“*One Hundred Miles on Horseback*”として大学の文芸誌*The Blackburnian*に掲載し、彼女は作家としての軌跡を歩み始めることとなった。1934年にSanta Feで亡くなるまで、彼女はおもに生活のために執筆活動に邁進する。長・短編小説、詩、劇、児童書、伝記、エッセイと多岐にわたる内容を扱った30作品以上の著書、雑誌や新聞に200以上の原稿を寄稿する。多作な作家であるばかりか、New Yorkや晩年を過ごしたNew Mexico州では多くの講演をし、ネイティブ・アメリカン文化をはじめ土地や自然の保護運動、さらにフェミニスト運動に携わるアクティヴィストとして精力的な活動を展開する。

E. Boyd Smithのイラストが付されてクリスマス用ギフト本の装丁をとった*The Land of Little Rain* (1903) (\*以下LRと記す)は、*Atlantic Monthly*掲載後に出版される。1988年刊行のLR序文においてEdward Abbeyが疑問を呈するように、オースティンが関与した生前の執筆や社会における活動は同書が出版され続けていたことを除き、長い間忘れられてきた。しかし、1970年代以降のおもに女性作家による文学作品をめぐる一連の再評価の機運の中で、Sierra Nevada山脈の東に位置するDeath Valley周辺Owens Valleyの土地と生態系の営みを描写し、“a small classic of American literature” (Hass xi)と評価されるにすぎなかったLRの著者オースティンは脚光を浴びることとなる。本発表では再評価の動きを「評価」することで、オースティン研究の方向性にひとつの指針を提示したい。

### [2] *The Land of Little Rain* 再評価の動き

LRは、オースティンが「境界線のない土地」と呼ぶ砂漠地帯の土地と生態系を描写する14編のスケッチから成る。彼女はその地域の乾いた土地とわずかな水域を背景に、200種以上の植物、動物、昆虫、鳥、魚などによる生態系の営みを描写する。季節の推移や天候の変化を受ける土地が生態系を決定する役を担う。食物連鎖のサイクルが機能する自然界の効率良い秩序の中で、生物が相互依存しながら命をつなぐ。1892年から1905年まで砂漠地帯に居住した体験が形成したオースティンの場所の感覚は、多様な自然界の様相をとらえる。苛酷で厳しい自然界の営みが、豊穰さと美しさによる畏敬の念で彼女を圧倒することもある。バスケットをつくる老女やメディシンマンなどのネイティブ・アメリカン、ヒスパニック系の住人、開拓者や羊飼いのような牧畜に携わる少数の白人は生態系を構成する一要素にすぎない。

LRを再評価する際、アメリカ西部の砂漠地帯という作品舞台、その土地で展開される自然界やネイティブ・アメリカンおよびヒスパニック系の人たちの生の営み、オースティンの自伝的事実と作品の関係という3点の特異性が重視される傾向にある。白人男性を中心とするイデオロギーが主流となり人間中心主義に立脚した近代化へと邁進していく時代に、オースティンは砂漠地帯のIndependenceで作品を執筆する。彼女は効率や利益を重視する風潮が価値を見出すことが困難な地域、デス・ヴァレー周

辺の苛酷な自然環境を作品の中心に据える。生物中心主義の視点に基づく作品は、John Muir の *The Mountains of California* (1894) と Aldo Leopold の *A Sand County Almanac* (1949) の間に位置するネイチャーライティングの作品として評価される。オースティンの周縁への視線は、砂漠という舞台だけでなくネイティブ・アメリカンやヒスパニック系の住民たちにも向けられる。生態系に適応して生きる姿や、彼らの場所の呼称を表記する。それらは、西欧の土地所有の概念とは異なる場所の感覚に由来する。少数民族を「見えない存在」とする時代に、その尊厳を重視するオースティンの姿勢が強調される。さらに、オースティンが家父長制のもとで苦悩したという自伝的な事実に言及し、彼女が砂漠の不毛さに共感を抱いた点を考察することも多い。<sup>1</sup> バケットをつくる Seyavi や、銀鋏夫に捨てられたネイティブ・アメリカンなど少数の女性にしか言及はないものの、執筆当時のオースティンの内的な葛藤を重ねることで普遍的な女性の状況を探求する。オースティンは1878年に父親 George Hunter を亡くして以来、結婚前は家長をつとめた兄、結婚後は1914年に離婚することになる夫 Stafford Wallace Austin の無理解に苦しむ。母親の愛情も得ることはなく、一人娘 Ruth も生まれつき障害を負っていた。妻、母の役割と、作家として自己確立を果たそうとする葛藤の過程が考察の焦点となる。オースティン再評価の動きは、環境文学あるいはネイチャーライティング批評、マルチ・カルチュアリズムあるいはポスト・コロニアリズム批評、フェミニズム批評という3領域を中心に論じられることが多い。また、エコフェミニズム批評のように、領域を横断することで批評の可能性は広がる。

アメリカで生じたオースティン再評価の流れを受け、日本では1995年『英語青年』「特集：ネイチャーライティング」において、山里氏が *LR* を「アメリカのネイチャーライティングの先駆的な作品のひとつといえるであろう」と伝記的な事実とともに作品の概要を紹介している。1996年『ユリイカ』「特集ネイチャーライティング」巻末の高田賢一氏編「アメリカン・ネイチャーライティングブックガイド30」では、「本書によってオースティンは、アメリカの女性で初めての本格的なネイチャーライターとして、また苛酷な自然とその中の美を表現する砂漠の語り部（ストーリーテラー）としての声を確立したといえる」と赤嶺氏が *LR* を紹介する。アメリカと日本での研究動向を概観する伊藤氏は、2004年に「テリトリイからプレイスへ」においてオースティン再評価の動きが「定着」したと論じる。

メアリー・オースティンは、前世紀末のネイチャーライティング・ジャンルの確立とエコクリティシズム批評制度の中で完全に再評価が定着した。日本からの三篇を含む続々と表れる研究によって、これまで主としてアングロ・アメリカンのマスキュリンな「光輝く荒野」(“pristine wilderness”)のパラダイムで形成されてきた砂漠の美学と西部神話に対し、『雨の少ない土地』は、南西部の土地が客体でなく主体となり、そこに住む女性とマイノリティと動植物の目と感覚から土地を物語る、西部のオルターナティブを提示していることが明らかになってきた。(81)

山里氏は Henry David Thoreau やアビーらとオースティンを比べて、「必ずしも野生に接近した」のが男性作家だけではなかったと彼女の特異性について述べる。さらに、オースティンのように「荒涼とした西部の砂漠を見つめる中で、先駆的なヴィジョンを獲得した女性の“Naturist”もいるのである」と、彼女の「先駆性」を評価する。同様に、赤嶺氏は「先住民の文化を現代文明に新しい生命を吹き込むものとして高く評価したオースティンの先駆的なヴィジョン」に意義を見出す。自然や環境、ネイティブ・アメリカンやヒスパニック系というマイノリティとみなされていた人々たち、さらに主流権力が彼らに及ぼす影響などを扱う *LR* は、現代社会が抱える関心を共有する。しかし、オースティンの「先駆性」に彼女自身の問題意識が照射されることは少ない。現代の視点による再評価と彼女が作品に投影した実像との接点は乖離する傾向にある。

### [3] 「再評価」を評価する

#### (1) 受動的な関係

同時代の西欧人には砂漠を生命や生態系が不在である空間とみなす傾向がある。一方、オースティンはそれを生命が枯渇した状態としてではなく、豊かな生態系が機能する場として提示する。しかし、彼女が生物中心主義の視点からそれを作品の主題としたことは、多くのネイチャーライターのように自然に意義を見出し、自らの意志でそこに対峙しようとした姿勢とは異なるものである。ソロー、ミュア、アビーらは、都会や文明にたいするひとつの表明として、それに抗い、自然や荒野へと向かう。オースティンは家長であった兄の希望により西部に移住する。当時、多くの女性が一家の移住に従わなければならないように、移動した土地にすぐに畏敬の念を感じたとはいえオースティンの移動は彼女の意志や希望が配慮されないものであった。彼女自身が砂漠の地を選んだのではない。彼女は受動的にその地と向き合わざるを得なかった。

夫の仕事の都合により移ったインディペンデンスで<sup>2</sup>オースティンはLRを執筆する。そこは、広大なMojave砂漠の中に位置し、西は3,000m級の山々が650kmにわたって聳えるシエラ・ネヴァダ山脈が連なり、東はデス・ヴァレーが広がる土地である。中西部の故郷を離れたオースティンは、San FranciscoやLos Angeles滞在を経た後に東西が山脈と砂漠に挟まれたインディペンデンスで暮らすことになる。山脈や砂漠は、故郷や都市や文明からインディペンデンスとそこに暮らすオースティンを隔離する。当時、インディペンデンスは人口が300人程度の町であった。初めて訪れた地形的に隔離された空間に、知的障害を持って生まれた娘と精神的に疎遠な夫とオースティンは暮らす。山脈とデス・ヴァレー砂漠によって物理的に閉鎖された空間において、彼女は家族を含めた周囲の人間との接点も断たれる。自然界の営みと土地を除き、周囲に存在するものはない隔離した状況に彼女は置かれることとなった。幼少期から自然界に志向があり大学で科学を専攻したオースティンは、土地と自然が周囲に存在する孤立した状況下でそれを詳細に観察し始める。砂が土地の上を移動することにより砂漠の風景は生物のごとく変化する。砂漠は彼女の周囲に存在する唯一の「他者」となる。彼女は複数の選択肢の中から人間ではなく土地や自然をLRの主題としたのではない。彼女の周囲にはそれしか存在しなかった。

#### (2) 先駆者たちの存在

アメリカ西部神話における女性不在が指摘される時代に、Caroline Kirklandの*A New Home—Who'll Follow? Or, Glimpses of Western Life* (1839)の意義と同様、それを主題としたオースティンの功績が評価を得る。Kolodnyが論じるように、当時の西部の女性たちが自然を開拓すべき庭とみなした姿勢とは異なりオースティンはその自律性に視線を向ける。しかし、周囲から隔離された状況下で、生態系の営みを注視せざるを得なかった必然性が指摘されることは少ない。また、LRは地方色文学とみなされることもある。<sup>3</sup>地方色文学という先行文学の流行を背景に、限定された地域の特性を主題とするオースティンの作品は登場する。LRにおいて言及されるBret Harteのような西部を描写する男性作家の活躍もあった。LR出版直前の1901年にはJohn C. Van Dykeが*The Desert: Further Studies in Natural Appearances*を発表している。*The Desert is No Lady*はオースティンが男性作家と異なった視点から土地や南西部を解釈していると指摘するが理由は明記されない。同様に、LRの特徴のひとつとされる科学的記述法にたいしても、男性による砂漠の描写と彼女のそれとの違いは言及されるもののその根拠は明言されない。大学入学前からリンネ派の命名法や分類法に傾倒していたオースティン(Hass xvii-xviii)は、LRの砂漠地帯を学名を多く使用することなどにより生態系を詳細に描出した。これらの表記は作品に客観性と科学的な正確さを付す。Michelle Campbell Tooheyは“Mary Austin's *The Land of Little Rain: Remembering the Coyote*”において、*National Geographic*と*Harper's Bazaar*両誌に掲載された砂漠の記述とLRのそれを比較する(*Exploring* 209)。学名表記による多様な生物種の列挙、地形学に基づく土地の描写、生物の環境への適応性にたいする描写といったLRの特徴にみら

れる科学的記述法は、同時代人と共通のものであると指摘する。彼女が自然を一方向的に解釈しない点を評価するが、その根拠は明確にされずに指摘にとどまる。

*LR* の舞台、主題、科学的記述法は先駆者や同時代の傾向と共有する点が多い。同様に、オースティンの多文化尊重の志向は彼女自身の「異質なもの」をとらえる視点によるものではなく、Lanigan が彼女の “a western literary mentor” (*Maverick* 64) と指摘する Charles Lummis とそのサークルの影響下で形成されたものである。スミソニアン協会刊行の *Handbook of American Indians North of Mexico* (1907) に過去形で記述されるネイティブ・アメリカンが遺物として客観的に言及される一方で、オースティンは彼らが生態系に順応して生きる姿を共感をもって映し出す (*Exploring* 212)。彼らに ‘primitive’ や ‘simplicity’ が象徴する劣性を見出す傾向が強い時代に彼女はそれと対極のものを認め、バスケットを作る盲目の老女セヤヴィを芸術家として表象する。ネイティブ・アメリカンやヒスパニック系住人、また多文化主義への傾倒は、オースティン再評価の重要な一因となる。卒業した大学の文芸誌や Ina Coolbrith が編集長を勤めていた *The Overland Monthly* への掲載経験はあるものの、執筆により経済的に自立することを目指したオースティンは文学界との接点がなかった。1899 年当時、西部で最も影響力をもつ文芸サークルを主催するロスアンゼルス・ルミスとの知己を求め、自宅に “the Southwest Museum” を備える彼の元を彼女は訪れるようになる。娘の治療を理由に彼の近隣に移り住んだ時期もある。

ルミスはニュー・メキシコ州 Ysleta Pueblo に 5 年間の居住経験があり、Adolph Bandelier, Edgar L. Hewett と並んで南西部のネイティブ・アメリカンやヒスパニック系住人たちへの研究で著名であった。オースティンは、ルミスの多文化主義への傾倒へ共感を示すことにより弟子として師弟関係を結ぶことに成功する。彼女はルミスの妻 Eve との友情から精神的な支えを得るばかりでなく、文学上の指導を受けて彼の編集雑誌に詩作を掲載することもあった。*LR* の執筆に与えたルミスの影響は大きく、作品執筆当時も彼より助言を得ていた。

In many ways Lummis's work became Austin's work, especially the close observations of Indian life and the recording of their tales. Over the years his idiosyncratic way of life, his place as cynosure of the western literary community, became goals to which Austin herself aspired. (*Maverick* 64-65)

オースティン独自の価値観や思想よりも、*LR* はルミスの影響が投影された作品としての性質が強い。

オースティンとルミスの関係は後に悪化するために、彼女は自伝においても彼の影響を詳細に言及しない。彼女は “Mr. Lummis did not take to her, nor she to him. She had no genius, he said; talent and industry and a certain kind of knowledge, but little gift.” (*Earth Horizon* 291) と述べるにとどまる。Lanigan の伝記も “Austin the scientist . . . is only a pose for Austin the storyteller and seeker of truth; her work differs quite markedly in this regard from that of Charles Lummis.” (*Maverick* 79) と、影響関係は指摘しながらも両者の作品の違いに関する根拠は明確ではない。彼女をめぐる批評の中でも Nicole Tonkovich の “At Cross Purposes: Church, State, and Sex in Mary Austin's *Isidro*” だけが、1880 年代の南西部を “myth” として提示することに成功したルミスが与えた影響力の大きさを指摘する。

During [Lummis's] years of acquaintance with Austin, he took over the editorship of *Land of Sunshine*, a magazine promoting regional interests, and fashioned it into an important venue for literature of the Southwest. Austin herself shared these interests, seeking with her writing to insist that “American” history and literature recognize the importance of the southwestern Indian and Hispanic cultures. (*Exploring* 8)

ルミスと出会う前は General Edward Fitzgerald Beal が務めたように、オースティンは男性指導者を求める傾向がある。<sup>4</sup> ルミスは彼女に性的な恐怖を与えず、10 歳も離れていない彼女を “my dear child” と呼びかけていたという。彼女のルミスへの傾倒は、文学に造詣が深く地元の新聞に寄稿をするなど執筆活動も行った父親の不在を埋める “the model for her of a literary man” (*Mary Austin Reader* 5) の探求であるとともに、母親、夫、障害をもった娘と精神的な絆が結べない彼女の愛情に枯渇した精神を反

映する。

ルミスのサークルでは、David Starr Jordan から地理学や動植物と環境の関わりを、著名な人類学者でありネイティブ・アメリカン民族誌家であった Frederick Webb Hodge からは価値を見出していなかった部族の習慣を集める手法をオースティンは学ぶ (Fink 99-100)。娘をおいて夫と離婚し、後にオースティンが同様の過程を経る際に影響を受けたことを認める Charlotte Perkins Gilman と出会ったのも彼のサークルにおいてのことである。ルミスとの出会いは LR 成立に不可欠で、その受けた恩恵は甚大なものである。作品舞台、主題、科学的記述法が先駆者たちの傾向や姿勢を共有する LR が、彼女の時代において極めて独創的なものであったと言いがたい。LR の再評価において指摘される「先駆性」は、オースティンと同時代の文脈においてその文学史上の功績が考慮されるべきであろう。

### (3) 商品としての西部

1890 年に Frederick Jackson Turner がフロンティア消滅宣言をする。アメリカ人の思想形成に寄与した西部の役割を過去のものとする 1893 年の講演 (“The Significance of the Frontier in American History”) は、大きな影響を及ぼす。フロンティアやウィルダネスにたいする郷愁の念が高まる時勢の中で、オースティンは文壇に登場する。東部の文芸誌は西部を主題とする傾向が強くなり、西部は商品としての価値をもつようになっていた (Hass vi)。父親を亡くして以来、彼女は夫の事業の失敗や娘の医療費の必要性から常に金銭問題に直面していた。経済的な自立を求めたことが大きな動機となり執筆に向かう。西部には本屋もなく読者の需要がないことを知っていた彼女は、作家を志した当初から東部の市場を視野に入れ、受容されやすい主題を意識的に探す (Maverick 45-46)。芸術作品が商品の価値を有するセヤヴィのバスケットのように (“Seyavi made baskets for love and sold them for money”), オースティンは商品としての価値をもつ作品を書かざるを得ない状況におかれていた。

エッセイ “How I Learned to Read and Write” (1961) において、1900 年頃に執筆で身を立てようとしたオースティンは文芸雑誌のリストを作成したことを回想する。そのトップに名をあげた「アトランティック・マンスリー」誌に投稿を試み、掲載されることとなる。LR は文学市場の需要に合った特異性ゆえに、同誌に掲載された後に 1 冊の本として市場に受容される。白人作家が西部やネイティブ・アメリカン文化を素材として作品を商品化する動向を「文化的所有」とみなし、オースティンの多文化主義的な視点を批判する動きもある。しかし、Graulich はオースティン作品におけるネイティブ・アメリカンに向けられる関心を、彼女の異文化への知識と尊厳の姿勢の反映とみなす批評が最近では主流となっていると指摘する (XVIII)。東部に収入を依存しながら西部の魅力を描出したオースティンが、それを「利用」することを意図して作者としての地位を得たことは事実である。収入の必要性から題材を選択する自由が制約を受けたこともあると後に告白するオースティンは、西部やそこに居住する人たちを商品として利用する一方、作家である彼女自身も「商品」として世紀末の文壇で扱われることとなった。

Ellis は LR の雑誌という初出形態に注目する。雑誌への投稿は、当時、無名の女性作家たちを輩出する媒体であった。1900 年までに雑誌文化はすでに地位を獲得し、作品を商品として流通させる手段となる。文壇と接点をもたない女性作家や、インディペンデンスのような物理的に隔離された場所からでも発表の機会をもつことを可能とした。オースティンが投稿を始める当時の文芸雑誌はすでに売り上げ競争が激化しており、需要次第で商品としての作品はすぐに市場から抹消された。商品価値を高め、読者の関心を維持しなければならないというオースティンの切迫した現実には、多くの批評家が指摘する LR における “discursive narrative” や代名詞の不統一な使用による視点の不明確さを生じさせる一因となる。たとえば、ネイティブ・アメリカンの言葉やスペイン語などの現地で使用される言語と学名表記などの専門用語。客観的な描写による科学的な記述と、砂漠を擬人化し、神の存在を意識した主観的な描写。LR における多層なナラティブの混在や “we;” “you;” “I” などの代名詞の不統一な使用は、作品の視点を揺るがす。とくに、多くのネイチャーライティングの作品が特徴とする土地や自然との交感

に基づく描写と比較すると、*LR*には“*You*”が多出する。たとえば、“... how many *you* would not believe without seeing the footprint tracings in the sand” (13), “The trail passes insensibly into them from the black pines and a thin belt of firs. *You* look back as *you* rise, and strain for glimpses of the tawny valley ...” (105), “There *you* get only a hint of what is about to happen ...” (133. 下線部は秋田による)などと、作品には一貫して「読者」が存在する。人間中心主義を脱却し、西部の土地や自然描写が評価される*LR*の作品世界は東部の存在を背景としており、作品空間には常に読者が介在している。

多層なディスコースの混在を、*LR*の多義性として評価するTooheyやHassのような批評家もいる。<sup>6</sup> 初出が作品毎の連載であったことが一貫性の欠如に結びつくことであろう。しかし、作家としての道を歩み出したばかりのオースティンが、師であるルミス、東部の出版社、読者の要求を満たす「商品」を執筆せざるを得なかった背景が一因となった可能性は否めない。土地や自然と交感する作者自身の声ばかりでなく、*LR*にはオースティンが応えようとする複数の「他者」の声が通底する。“*You*”と喚起することで東部の読者の関心を引かざるを得ないオースティンの切実な訴えが作品に反響する。「商品」である作品には、消化されていない複数の声を引き起こす矛盾が顕在化する。

#### [4] おわりに

現代社会と関心を共有する*LR*は再評価がすすみ、それは定着したと言及されるようになっていく。本発表では再評価に孕む問題提示を試み、オースティン研究のさらなる可能性を示唆することを目的とした。西部を扱う*LR*が異質性ゆえに東部の市場で受容されたことを考慮し、現代の読者はそれを偶像化することなく本質を正当に評価しなければならない。今日の視点からではなく、発表当時の文脈の中で*LR*の再評価が遂行される必要があろう。

オースティンは時代の主流志向に逆らう問題意識を*LR*において提示したと再評価される。彼女の諸問題にたいする先駆性は、砂漠の生物が有するよう力強い生命力をオースティン像に付与することとなる。しかし、インディペンデンスで物理的にも精神的にも孤立したオースティンは、土地や自然の生命を見出し、それを描写することによりかろうじて生命とつながる。大学時代に精神を病んだ経験もあるオースティンは土地や自然に拠ることで自己消失の危機から脱し、作家として生きる道を模索する。閉塞した砂漠地帯で、オースティンは凝縮した生命の営みに向き合う。

オースティンの言説によって、土地や自然の意義や価値が見出されたのではない。土地や自然が彼女を支え、助け、生かしたのである。

#### 注

- <sup>1</sup> Nelsonのように、オースティンが砂漠に不毛性を見出したことがなかったと指摘することで、彼女の実人生と砂漠の乾きを結びつける批評群に異議をはさむ研究者もいる。
- <sup>2</sup> オースティンが反対するインディペンデンス行きを夫が強行したのは、知的障害を負った娘と、自我と個性が強い妻を周囲の目から隠すためだったとの動機も指摘される。妻を周囲の人間から隔離し、孤立した状態に追いやることは夫の意図するところであった (*Maverick* 59)。
- <sup>3</sup> オースティンは“*Regionalism in American Fiction*”(1932)において、作品の背景にすぎない「地方」を扱う小説よりも、その「地域(‘region’)」の自律性を描写する作品の価値を主張する。地方色文学とみなされることを否定する主張は、逆にそれとの関係を照射する。
- <sup>4</sup> 女性が執筆する際、モデルとなる女性作家が不在なことはフェミニズムの視点からよく指摘される。
- <sup>5</sup> *Stories* 95. 以下、引用はこの版により、頁数は引用末括弧内に示す。
- <sup>6</sup> *Exploring* 207. Tooheyは*LR*にRoland Barthesのテキストとの類似性を指摘し評価する。また、Hassは視点の混在や、登場したり消失したりする作者の声の扱いにおける不統一さが作品世界に広がりをもたらすものと評価する (xxiv)。

## 注

- Austin, Mary. *Beyond Borders: The Selected Essays of Mary Austin*. ed. Reuben J. Ellis. Carbondale: Southern Illinois UP, 1996.
- . *Earth Horizon*. 1932. Albuquerque: U. of New Mexico P, 1991.
- . *The Land of Little Rain*. 1903. Rep. with an introduction of Edward Abbey, NY: Penguin, 1988; Rep. with an introduction of Terry Tempest Williams, NY: Penguin, 1997; Rep. with an introduction of Robert Hass. NY: Random House, Inc., 2003.
- . *A Mary Austin Reader*. ed. Esther F. Lanigan. Tucson: U of Arizona P, 1996.
- . *Stories from the Country of Lost Borders*. ed. Marjorie Pryse. New Brunswick: Rutgers UP, 1995.
- Church, Peggy Pond. *Wind's Trail: The Early Life of Mary Austin*. Santa Fe: Museum of New Mexico P, 1990.
- Drinnon, Richard. *Facing West: The Metaphysics of Indian-Hating and Empire-Building*. Minneapolis: U of Minnesota P, 1980.
- Fink, Augusta. *I-Mary: A Biography of Mary Austin*. Tucson: U of Arizona P, 1983.
- Graulich, Melody and Elizabeth Klimasmith eds. *Exploring Lost Borders: Critical Essays on Mary Austin*. Reno: U. of Nevada P, 1999.
- Hoyer, Mark T. *Dancing Ghosts: Native American and Christian Syncretism in Mary Austin's Work*. Reno: U of Nevada P, 1998.
- Kolodny, Annette. *The Land before Her: Fantasy and Experience of the American Frontiers, 1630-1860*. Chapel Hill: U of North Carolina P, 1984.
- Lanigan, Esther F. 1989. *Mary Austin: Song of a Maverick*. Tucson: U of Arizona P, 1997.
- Leopold, Aldo. *A Sand County Almanac*. 1949. NY: Ballantine Books, 1966.
- Nelson, Barney. *The Wild and the Domestic: Animal Representation, Ecocriticism, and Western American Literature*. Reno: U of Nevada P, 2000.
- Norwood, Vera and Janice Monk eds. *The Desert is No Lady*. New Haven: Yale UP, 1987.
- O'Grady, John P. *Pilgrims to the Wild*. Salt Lake City: U of Utah P, 1993.
- Pearce, T.M. ed. *Literary America 1903-1934: The Mary Austin Letters*. Connecticut: Greenwood P, 1979.
- Scheick, William J. "Mary Austin's Disfigurement of the Southwest in *The Land of Little Rain*." *Western American Literature* 27 (1992): 37-46.
- 赤嶺玲子 「『雨がめったに降らない土地』 (1903) 作品紹介」, 『ユリイカ: 増頁特集\*ネイチャーライティング』 (青土社, 1996年3月号), 238頁.
- 「自然とジェンダー—メアリー・オースティンによる砂漠の表象」, 『文学と環境』 第3号 (ふみくら書房, 2000年), 41-47頁.
- 伊藤詔子 「テリトリイからプレイスへ—『ウォールデン』と『境界の失われた土地の物語』」, 『自然と文学のダイアログ: 都市・田園・野生』 (彩流社, 2004年), 81-96頁.
- 山里勝己 「砂漠と人間—Mary Austinの*The Land of Little Rain*—」, 『英語青年』 第140巻 第11号 (研究社, 1995年), 563頁.
- 吉田美津 「メアリー・オースティンとボーダーとしての砂漠」, 『新しい風景のアメリカ』 (南雲堂, 2003年), 189-197頁.